



Title	日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大西, 由美
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第11425号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55402
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yumi_Onishi_review.pdf (「審査の要旨」)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：大西由美

審査委員	主査 教授	小林 由子
	副査 教授	河合 靖
	副査 准教授	廣森 友人

(明治大学国際日本学部)

学位論文題名

日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究

—日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に—

海外において、日本語専攻の学習者の日本語学習動機が途中で低減することは、大きな問題とされてきた。本研究では、ウクライナの大学で日本語を専攻する大学生を対象とし、動機づけの構造および変化を明らかにするために縦断的に調査を行い、検討を行った。ウクライナは日本語接触機会が少ない環境である。接触機会が多い環境に比べ、動機づけが維持されにくいと考えられ、特に「高学年になると意欲が下がる」ことが言われている。本研究は、そのような環境において動機づけがどのように変化しているのか、また、変化の要因は何かについて様々な側面から検討している。

日本語学習動機づけの構造は低学年と高学年で異なること、高学年では動機づけ構造により目標と目標達成見込みが異なること、目標志向と目標達成見込みに関連があること、自己評価・目標・目標達成見込み・有能感が日本語学習動機づけに大きく関わるものが、本研究の主な主張である。

本研究が評価される点の第一は、第二言語習得・日本語教育・教育心理学の分野における動機づけ理論のレビューを非常に詳細に行い、そのうえで、学習目標や目標達成見込みの観点からウクライナの学習者の学習動機について分析していることである。従来の日本語教育分野における学習動機づけ研究では、主に「統合的・道具的動機づけ」理論の枠組みから、ある地域における学習者の学習動機づけの構造が記述されるものがほとんどであり、日本語学習動機づけが他の理論的観点からも位置づけて論じられることはほとんどなかった。本研究では、学習動機づけについての理論を俯瞰し、「内容必然的」「状況必然的」「自己必然的」という枠組みの

なかでウクライナの日本語学習者の学習動機の変化を論じている。これは、日本語教育分野での学習動機づけ研究に新たな研究の視座をもたらすものである。

本研究が評価される点の第二は、研究方法に関するものである。従来、日本語教育分野においては、学習動機づけ研究は、先行研究に倣った質問紙を用いた一度のみの調査による、ある特定地域での動機づけ構造の分析が多かった。しかし、学習動機づけの構造は社会によって異なり、一度のみの調査では動機づけの変化について知ることは困難である。本研究は、予備調査を行い、動機づけ構造を測定するための独自の尺度を開発し、ウクライナで4年間にわたる縦断的調査を行った。その結果、先行研究には見られなかった日本語学習動機が見いだされ、動機づけの変化を明らかにすることができた。さらに、CEFRによる指標を用いて質問紙を開発し学習目標や目標達成見込みについても調査を行い、学習者をクラスターに分けて分析することによって、学習者の属性による動機づけの違いを明らかにした。この手法は独自性が高く、今後の日本語学習動機づけ研究に大きく資するものである。

評価される点の第三は、上述した理論的な位置づけや新たな研究手法により、従来から問題とされてきた海外で第二言語として日本語を学ぶ者の動機づけの変化とその変化に関わる要因が詳細に記述され、今後の教育への貢献が可能となったことである。ウクライナでの日本語教育においては留学機会の喪失が学習動機の低減に大きく関わりとされてきたが、本研究は、学年が進むにつれ動機づけ構造が変化すると同時に、留学機会のような外的な要因だけではなく、学習者の「日本文化志向」「キャリア志向」「語学学習志向」という学習志向性や、有能感・目標設定・目標達成見込みが、動機づけの変化に大きく関わることを明らかにした。これらの知見は、今後、ウクライナの日本語教育現場における学習者への働きかけに資すると同時に、同様に学習動機の低減という問題を抱える他の日本語教育の現場にも貢献するものである。

審査においては、ボトムアップで学習動機づけ尺度を構成することは、その社会独自の動機づけ構造を示すことができる一方、他地域との比較を困難にし研究を狭める可能性があるのではという指摘があった。また、「内容必然的」「状況必然的」「自己必然的」という動機づけの枠組みについても、先行研究との比較が難しいという指摘があった。しかしながら、これらの指摘については、今後、他の地域で調査が行われて比較されていくことによって、それぞれの共通点・相違点が明らかになり、解決されていくと考えられる。

以上の点から、本審査委員会は、大西氏が、北海道大学博士（学術）を授与される資格を有すると結論するものである。

(以上)